

2005年度岩本ゼミ活動報告

大隈 拓也

春合宿（3月31日、4月1日）

春合宿は姫路で行った。以下二冊の本を輪読した。

- ・「経済学思考の技術」 飯田泰之 ダイアモンド社
- ・「経済学者たちの闘い」 若田部昌澄 東洋経済新報社

「経済学思考の技術」は2回生に担当してもらった。この本のテーマは経済学を用いた論理的思考のトレーニングをすることである。具体的な経済状態を経済理論やデータによって読み解いていくプロセスが明確に示されている。最後には、本文を通して学んできた方法で実際の日本経済を考察するにいたる。4月からゼミで本格的に経済学を学んでいく2回生には良いイントロダクションになったのではないかと思う。特に後期のインゼミで必要とされる基本的な思考パターンでもあったので、ぜひこの機会に身につけておいて欲しかった。

「経済学者たちの闘い」は3回生が担当した。この本のテーマは、過去の経済学者たちが当時の経済問題にいかに関わり立っていったかを明らかにすることで、現在の経済問題を考える道筋を示すことである。やや変わった視点からではあるが、中央銀行の役割、デフレ、セーフガードなどに関する考察を行い日本経済再生の道筋を探る、という内容になっていた。重要な経済理論も広く網羅されており、3回生はバランスよく復習と予習ができたと思う。

夜は楽しく酒を飲み、大いに盛り上がった。帰りには姫路城観光や城周辺の散歩などを行った。桜の開花が例年に比べて遅かったのは心残りであるが、楽しい時間を過ごすことができた。

前期ゼミ

国際貿易を勉強した。サブゼミでは計量経済学を扱った。

正規のゼミはテキストの輪読形式で進めていった。テキストは「国際経済学入門 I 国際貿易編」(R. E. ケイブズ、J. A. フランケル 著)を扱った。テキストには難解な箇所が所々あり、その度に先生や先輩方の力をお借りした。難解な理論を吟味して吸収できた点は収穫である。ただ、個人的にはもっと自由闊

達に議論する場面を作るべきであったと反省している。いかなる学問においてもアウトプットの作業を欠かすことはできない。ゼミで与えられた貴重な時間を、インプットの確認だけでなくアウトプットの間として有効的に活用していく工夫が足りなかった。今後のゼミの運営にこの反省を生かして欲しいと思う。

サブゼミでは計量経済学を勉強した。経済学を学ぶ上で欠かせない分野でありながらカリキュラム的に手薄であったからだ。テキストは「計量経済学」(山本 拓著)を扱った。週1回の勉強で使いこなせるようになるわけではないが、基本的な計量の方法や仕組みを学ぶことができた。計量分析が織り込まれた論文をきちんと読みこなせるようになったのは収穫であったと思う。

夏合宿(9月29日、30日)

夏合宿は香川で行った。7月に人民元の切り上げが行われたこともあり、後期のインゼミで人民元を扱うことが決まっていたためそれに沿った勉強をすることになった。テキストは「人民元切り上げ論争」(関 志雄 著)を選んだ。それまで人民元の問題はさまざまに論じられていたが、この本はその論点整理として非常に役立つものである。前期で国際貿易を中心に勉強してきたので、貿易論からの視点を重要視した。後期のインゼミに向けた良い準備になったと思う。

二日間を通じて讃岐うどんを食べ歩いた。綿密なプランを立ててくれた合宿係の酒井さんに改めて感謝したい。

後期ゼミ

後期はインゼミに向けた勉強が中心となった。ゼミを3つの班に分け、ディベートに取り組む班1つと、論文に取り組む班を2つ作った。正規のゼミの時間はそれぞれの班が途中経過を報告し、先生や先輩方、他のゼミ生の意見を参考にした上でのグループワークに取り組んだ。各班でサブゼミを設定して勉強を進めていった。当初は岩本ゼミとしての統一テーマを設定することが目標であったが論文を政策発表の形にすることが条件とされたためその過程で3班とも少しずつ異なったテーマとなった。それでも、各班の相乗効果はあったのではないかと思う。

ディベートは高崎経済大学と行った。人民元切り上げが日本経済に与える影響はプラスかマイナスか、というテーマであった。岩本ゼミはプラスの立場に立った。テーマ設定、交渉には早くから取り組んだものの、双方の意見の食い違いや、同じ言葉の解釈をめぐる論争が遅くまで続いてしまったのは反省点である。本番では相互に建設的な議論をするように心がけた結果、全体的に有意義なディベートができた。岩本ゼミは勝利することができ、ディベート後のフリーディスカッ

ションなどは良い勉強になった。

論文班の一つは、去年から参加したWEST論文発表会に向けて取り組んだ。貿易論からの政策提言をすること自体が困難であり、テーマ設定に時間がかかったが、最終的に日中貿易をメインに論文を制作した。斬新な論点を発見するのが難しい分野であり幾度も壁にぶつかったが、それだけ様々な分析ができ、深く勉強できたと思う。最後は短い時間の中で完成にこぎつけることができた。特にリーダーの本君は忙しい中まとめ役として非常に頑張ってくれた。当日は他大学の論文発表を聞くなど良い刺激になった。

もう一つは今年から参加したISFJ論文発表会である。こちらは国際金融の面から論文に取り組んだ。国際収支の不均衡を切り口に、政策提言に結び付けていった。中間締め切りが複数回あり慌ただしい印象を受けたが、リーダーの登地君が計画的に取り組むことに尽力してくれ、全てクリアしていくことができた。当日は二日間東京に滞在するというややハードなものであったが良く頑張ってくれたと思う。

2つの論文発表会に関してだが、両者とも政治色が強く論文を政策提言の形にすることが前提条件である。このような形で論文の出口が縛られていると、扱えるテーマが極端に限られる上、前期の学習を生かしきれないという問題があった。そこで来年以降は参加を見合わせ、国際経済学を扱うゼミを集め、新たに論文発表の場を作るという意見がある。まだ構想の段階であるがこちらの方はアカデミックに論文発表をする環境を整えることが主眼となっており、大いに期待したい。

後記

今年も向上心の高いゼミ生が多かったおかげで全体として充実したゼミを創ることができた。本番に向けて夜遅くまで作業を続けるなど大変なこともあったが、各自得たものも大きいと思う。試行錯誤を繰り返しながら皆で様々な意見を出し、最終的にひとつのことを成し遂げていくのは貴重な経験であった。3回生は責任持って運営に携わってくれ、2回生もインゼミの戦力としてよく頑張っていた。先生・先輩方にはそういった活動を全面的にバックアップしていただいた。改めてお礼を言いたい。

大学内でもアカデミックな場は少なくなっている印象を受ける。そんな中、このゼミの活動を通してのびのびと学問に取り組めるのは有難いことだ。

今後も一層充実し、活気に溢れるゼミになっていくことを期待したい。